



モバイルインターネットの移り変わり

■ 木寺 祥友



米国に来てこの原稿を書いています。Java を利用したプラットフォーム構築を長年やってきて、最近思っていることをお伝えします。驚くことにインターネットサービスの最先端である米国では、スマートフォン前提のサービスがどんどん普及しています。時代をさかのぼって振り返ってみると、携帯電話をインターネットにつないでモバイルインターネットを実現したのは、日本が世界で最初でした。しかし NTT ドコモ、KDDI など携帯電話キャリアのプラットフォームからインターネットにアクセスするという制限があったため、現在のような自由なモバイル環境は実現できませんでした。公式サイトと呼ばれる携帯電話キャリア公認のコンテンツプロバイダはキャリア決済の恩恵を受けて収益を拡大させていきましたが、残念ながらスマートフォンが普及してからというもの、これらのコンテンツプロバイダは事業縮小を余儀なくされ、今ではほとんど残っていません。

それにとって代わったのが米国から登場した iPhone などスマートフォンを使ったモバイルインターネットです。私はこのどちらのプラットフォームにもかかわったので分かるのですが、日本企業は世界に打って出る最大のチャンスがありましたが、残念ながらそれを実現できませんでした。携帯電話キャリアの都合を優先してユーザの利便性を考えなかったということが、最大の敗因なのではないでしょうか。電話というものにこだわり、インターネットという世界的なプラットフォームに対抗しようとしたからです。会社が社会という日本企業の風土が最大のチャンスを逃したのです。

■ 木寺 祥友
M&A テクノロジー代表取締役

日本人として初めて Java を手がけたことによって、数々の Java プロジェクトに携わる。現在は政府系システムのオープンスタンダード化を推進するために発足された、一般社団法人オープンガバメント・コンソーシアムの顧問も務めている。



私は、モバイルインターネットには進化があると思っています。第一世代である日本が先行した i モードをはじめとしたインターネット携帯電話。第二世代である米国発の iPhone をはじめとしたスマートフォン。

NTT テレマーケティングのプロジェクトに参加したのが、日本初の Java プログラマーになるきっかけでしたが、一番の転換期といえたのが、ダム端末からクライアントサーバへの移行期でした。すべてのデータはメインフレームにあり、端末はあくまでも閲覧と修正をするだけの機能でした。それがクライアントサーバになりフロントにも役割の一部を担わせることによって、スムーズにコンピューティング環境を構築することができたのです。まさにブラウザ主体からアプリ主体への転換と同じです。

スマートフォンのコンピューティング機能をフル活用することは、サーバの負荷を低減させるだけではなく、よりスムーズなコンピューティング環境を構築することができるのです。これによってアプリは単なるブックマークではなく、通信環境の不安定さを吸収するとともに快適なインタラクションが可能になったのです。携帯電話が通話機能しかなかった 1996 年に出した私の著書『Java を創った人々』にも書いていますが、「今後 Java の実行だけに絞ったとしてもより簡素化された端末が登場するだろう。また軽量化により携帯端末として電話機と一緒に売られるものが発売されるだろう。特に電話機との融合は重要でいつでもどこでもネットワークに繋がられる魅力は計り知れないものがある」というものをまさに実現しているのです。

今後も Java をプラットフォームとしたサービスが登場するかもしれません。